

## 編集室から

今月号にご寄稿を頂いた浜谷さんとは、面識を頂いておりませんが、実はお母様の藤森さんとは何度かお会いしたことがあります。

農家のかあちゃん手づくりとか、女性の起業、道の駅という言葉が、まだ生まれていなかったり一般的ではなかった頃、浜谷さんのお母様はお仲間の方々と、それこそ獅子奮迅、七転び八起きの活躍で川根の国道沿いに「四季の里」というお店を開かれています。今から十数年前、お母様は各地で講演されたり、起業の裏話を出版されるなど忙しくされていました。

丁度その頃、お目にかかり第一回の石川県地域づくり大会の分科会にゲストとしてお越しいただくご縁を頂きました。

この時、一緒にお招きした高知の(株)四万十ドラマの畦地さんは、今では全国区になり大活躍。大会の帰途、藤森さんが「彼は伸びるわよ」と言っておられたことが今でも耳に残っています。石川の大会もその時以来毎年欠かさず開催され、今では全国各地からもご参加いただくほどになりました。

今回の仲を取り持っていただいた遠州横須賀のOさんを始め、つくづくご縁の妙を感じています。

さて、今月号の表紙写真は、毎年この時期に兼六園で開催されている冬のライトアップの昨年のもので、いつもなら、閉園してしまっている時間帯が無料開放され、普段見られない雪つりの夜景を堪能できます。

今年は、二月に入り、また雪が降り始めました。雪の夜景はさぞかし美しいことでしょう。

日本海の魚介類もこの時期が一番豊かです。上野・金沢間をつないでいた二つの夜行列車、急行能登と、寝台特急北陸が来月廃止となります。ラストランに乗ってみませんか？(は)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2010/02  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)



2010/02  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 卯月



兼六園冬のライトアップ  
by hama

## 寄稿 『なんで運がいいのか』

かわね来風理事 浜谷 友子

昨年の暮れにプロフィールを書く機会があり、私はどんな人間なのか、今まであまり考えたことのない事を考えるチャンスがあった。

その結果、私は「人と運に恵まれるタイプ」だと判明した。

人に恵まれるという事は、以前から自分でもわかってきた。例えば、学校や地区の役員にならざるを得ない時、忙しいのに面倒だなど思いながらもやってみれば、みんなの協力があがり、一年はあつという間に楽しく過ぎていく。又、仕事では長年、ある実行委員長をやっているが、それも各々がそれぞれの仕事をテキパキとこなしてくれるので、私には何の苦労もない。Okサインを出しているだけだ。だから私は、毎年それが終わるたびに「また私でいいの？」と尋ねる。私ばかり楽で申し訳ないと思うからだ。するとみんなは、いいから黙って座ってる、らしき事を言うので、ありがたくその座に居座っている。

2008年末、私は「まちづくり推進事業」を中心とするNPO法人を立ち上げた。これも又、私の中では順調で、本当に楽しい。楽しいという事は、人との関係がうまくいっているという事だ。ありがたいことだと思う。

さらに、そこで私はやりたい事だけをやっている。やりたい事があると、今度はそれをすぐに人に

言っている。どんな妄想が広がって、誰でもいいから、この「我ながら素晴らしい思い付き」を話したくなるのだ。

そして、私が運のいい人間になれるポイントはこのふたつにあるのだ、と昨年末洗濯物を干しながらふと気付いたので、早速みなさんにお話ししている次第だ。

みなさんもそうだと思うが、やりたい事ならすぐ動ける。動けば結果が付いてくる。又それを人に言うておけば、思わぬ所から情報が入ってくる。タイムング良く情報が入るのは本当に運がいい事だと思う。又、話しているうちに、自分の中でも輪郭がはつきり見えてくるし、たまには自分の思ったことがそれほどでもないことに気付いたりする。

こうして私は、自分の本当の想いが実現でき、運がいいな」と、にやにやしているのだ。だから今年の私は、さらにおしゃべりになってしまおうと思う。これからやりたい事がいっぱいある。運を引き寄せるためにも、それをみなさんにお話ししておきたいのだが、スペースがもうないので、又聞いて下さい。



【プロフィール】  
（はまたに ともこ）静岡県川根本町在住。天職だと思っていた音楽教室の仕事を経営して卒業し、新たな天職「まちづくり推進事業」に目覚めた。NPO法人かわね来風（ライブ）理事。ホームページをご覧ください。  
<http://www2.wbsn.jp/~k-life/>

## 濱のつばき 『眠り』

今年早くも一月が過ぎてしまった。これから三月末にかけての年度末は、我々の業界にとって一番忙しい時期となる。以前に比べ、日々ゆったりと過ごすように気をつけているが、それでもこの時間が飛ぶように過ぎてゆくのは、一体何故であろうか？

時の流れのままにウツカリしていると、忘れ物をしたり、ポカミスを生んだりしやすくなるようだ。禅では「今此処」といって、毎瞬間瞬間を真剣に生きよと教えている。「今此処」に徹して生きることができれば、ウツカリミスが入り込む隙間もなくなるはずだ。ところが、全ての瞬間瞬間を意識的に生きるといふことは、中々どうしてできそうにない。とつい、考えてしまう。凡人の凡人たるゆえんだ。

そんな中、ある人から「だからほとんど人は、眠りながら歩いているようなものだ」と聞いて、ドキリとしました。

我々は普段、目を開けていても、ほとんど無意識に身体を動かし、行動している。行動は自動化されているから、意識は全く別なことを考えていたりする。自分の細かい行動を全く思い出せないこともある。その隙間こそ、意識が「今此処」になく、眠ってしまった

ている瞬間なのかもしれない。このようにしてウツカリやポカが、無意識・無自覚に引き起こされるならば、怖ろしいことではないだろうか。

先日、東海道新幹線が数時間にわたり停止する事故があった。この日、丁度名古屋から東京に向かう出張の途上にいた。幸い、ホームに上がるとまもなく運転再開。次に入線してきたこだま号に乗り、東京までゆつたりと座ることができたが、隣ののぞみ号には人々が群がり、大変な混雑になっていた。

後日、その原因は点検の単純ミスと判明したと報道された。世の中が高度化するにつけ、一人・一チームのポカミスが社会全体に及ぼす影響は、予想外に大きくなることもある。本来、重要な行動を無意識に処理しつつ、頭は別な心配事にかまけて注意を怠り、結果として重大なミスを起してしまつては、何をかいわんやである。勿論、新幹線の件は、点検方法・確認方法を改めるのだから、果たしてそれだけで根本的な解決になるのだろうか。

今日の我が国で、意識が眠ってしまうような生き方が増えているのだとしたら、社会の構造的な問題なのかも知れないと思うのだが、如何であろうか。

## 『きただより40 ノースアジア大学 上村 康之 『バンクーバーオリンピックを前に カーリングのまち・青森市2』』

バンクーバー冬季オリンピック(以下、五輪とする)の開催が迫っている。青森県関係で今回の五輪代表に選ばれた団体・選手は、カーリングのチーム青森とノルディックの福田修子選手である。かつてアルペン、ノルディック、スピードスケート、アイスホッケーと冬の五輪に多くの選手を輩出してきた青森県であるが、過去に比べると非常に寂しい状況である。

この「きただより」で「カーリングのまち・青森市」を書かせていただいたのが前回のトリノ五輪直後であり4年が経った。

チーム青森は国内予選を勝ち2大会連続でオリンピック代表となり、愛称も「クリスタルジャパン」と名づけられた。1月下旬には青森市で盛大な壮行会が開催され、関係者だけではなく一般参加も受け付けた。今回はメダルの可能性もあるとのことで、前回以上に期待が集まっている。

チーム青森は、トリノ五輪後、メンバー5人のうち3人が入れ替わった。前回の「きただより」でも述べたが、青森県出身の選手はいない。青森市が20年ほど前から「青森の冬を楽しく、市民が気軽に参加できるスポーツ」として「カーリングのまち・青森」を目指してきた。その方向のなかで、前回の代表であった小野寺歩さんと林弓枝さんを北海道から青森市文化スポーツ振興公社に招き、現在主将である目黒萌絵さん、本橋麻里さんら当時、北海道のジュニア有力選手を招いた。今回のチームから新たに加わった3人は、北海道から近江谷杏菜さんは青森市役所、長野県から山浦麻葉さんは地方紙の新聞社、石塚琴美さんは青森市の理美容専門学校に所属、目黒さんも地方銀行に所属しており、地域の企業や学校が選手を支えている。

また、青森市の企業や大学にカーリング部が誕生し、小学生や一般の各種大会開催も増え、着実に青森市にカーリングが根付き人気も増してきている。

青森市及び青森県にとってもよいと思うが、サッカーのJリーグ、バスケのbjリーグのようにプロスポーツチームや、また有力な社会人スポーツのチームもなく、地域でまとまって応援するというものがなかった。もともと青森県は団体競技よりも、相撲、卓球、レスリング、ボクシングなど個人競技が強かったという特質もあると思うが、資金や設備を要する団体スポーツに対しそれを負担しきれない企業がなかった、またスポーツを地域振興にという状況ではなかったという要因が大きかったと思う。

ここにきて、「自分たちのまちのチーム」が誕生し、市民、企業、行政それぞれが一体となり支援しようという空気が醸成されてきたことが最大の効果であろう。

私事であるが、郷土青森を離れ5年が経ち、チーム青森の存在はとても嬉しいものがある。五輪のTV中継が始まると、また寝不足の日が続くであろう。

同じ北東北でも青森県と秋田県では、大きくスポーツ事情が異なる。秋田県にはTDKという企業が存在し、都市対抗野球の優勝経験がある社会人野球チームを持ちJリーグを目指すJFLチームの母体となるチームを持っていた(2010年度からクラブ化しは「ブラウブリッツ秋田」)そして、秋田県のお家芸でもあるラグビーとバスケトでは社会人ラグビー・トッパーストリーグの「秋田ノーザンブレッツ」、2010年からバスケトbjリーグにする参入する「秋田ノーザンハビネッツ」がある。いまこれらのスポーツが一体となって秋田県を盛り上げようという状況になっている。

秋田県のスポーツ事情については、またこのきただよりで報告したい。

## 『Insurance&Taxコンサルティング No22』 ブルデンシャル生命保険(株) 金沢支社 窪 正裕

### 相続について

#### 養子縁組で相続税を軽減

今回のケースは、孫を養子縁組にして相続税を軽減しようとしたことが、親族間のトラブルを招いてしまったケースです。

#### Case Study

高田さん(仮名)の母親は5年前に亡くなり、昨年父親も亡くなりました。生前父親は相続税の軽減のため、高田さんの小学3年生の次男を養子縁組にして、相続人を高田さんの2人の妹と合わせて4人にしてありました。

財産分与の話し合いの席上、この話を初めて知った妹たちは全く納得しません。

高田さんは相続に関わる基礎控除が増えるし、累進税率も下がるため良いことづくめと思い、

「せっかく親父がしてくれたことなんだからこの通りいこう」

といいますが、妹たちから

「それは父親が勝手にしたこと、私たちには何の関係もない。それに遺言状もないし遺産は兄妹で平等に分けるべき」と言って譲りません。

話し合いは平行線をたどり、決着の目処が立たないに状態になってしまいました。

#### Answer

相続税の計算上、養子を法定相続人に含めることができる人数は、実子がいない場合は2人、実子がいる場合は1人と定められています。

相続の基礎控除(最初から無かったものとして差し引かれる金額):5000万円+1000万円×法定相続人数

ですから、高田さんのケースでは次男の分を含めると9000万円になります。

確かに控除額が増える分、相続税も軽減されますが、妹さんたちにしてみれば、いきなり長男の子が相続人になっているため、自分たちの相続財産が減るわけですから面白いはずがありません。

父親の生前に、養子縁組のことを高田さんの2人の妹にはきちんと説明して、了解をとっておく必要があったと思います。

また、このように父親の意図が強く働いている場合、やはり遺言書は用意しておくことは必要になります。

今回のケースでは、当初の「節税」という目的は確かに果たせたかもしれませんが、今まで仲のよかった兄妹は絶縁状態になってしまいました。

それでは、あまりにも意味のないことになってしまいました。

たとえば、他の孫たちにも生前贈与で財産分与をかけておくという方法もあったわけですが。

相続の際、親・兄弟で感情的なしこりや争いごとを残さないためにも、これらのことを必ず念頭に入れて準備しておきたいものです。

下田温泉旅館協同組合の組合長から「近く下田に来られないか？」と電話が入った。全国各地の温泉場は景気低迷、インフルエンザ、その他地域の事情から客数の減少に喘いでいる。それに加え、伊豆は盆前、年末年始前のかき入れ時に襲われた地震でさらにダメージはひどい。

ぼやいていても、お客がかつてのように来るわけでも無し。何か妙案はと言われ、以前から温めていた市民送客システムを提案した。そこそこの部屋数を抱える旅館・ホテルは旅行会社やネット業者による送客が多い。これに顔の見える関係の送客があったら面白い、それが市民送客システムだ。それと旅館を貴方の客間に使いませんか、という市民に旅館を開くという意味が籠められている。

お客を紹介すればそのお礼を出す。旅行代理店に出している手数料のことと思えばなんてことはない。でも現金を渡すことには抵抗がある。いろいろ課題はありそうだ。何かをやって誘客をしたい、できない理由を並び立てる旅館組合員の意識改革をねらったのこともあって、組合長らは走り出した。法的に問題ないか、現金に代わるお礼はないか。そこで浮上した下田商店街でつかえるプレミアム商品券、これは旅館でも利用できる。提案から数ヶ月が過ぎ、新聞記事に「あなたの大切なお客様を下田に泊めよう！市民も得するキャンペーン」がスタート、それを利用して会社同僚四人を下田に連れて来た方を伊豆下田駅で出迎える旅館組合の面々の写真も合わせて掲載された。

「どうですか、その後？」「一ヶ月で50人ほどの利用がありましたよ。でもね、人数じゃ無いんですよ、何より市民の目が旅館に向いてきていることが嬉しいんですよ。」3月まで実施し検証してから続行を決めるとのことだが、きっと続くことになるだろう。

さらに、組合長らのお楽しみは続く、その第二弾が坂本龍馬だ。

土佐藩を脱藩した龍馬は、1863(文久3)年1月「勝海舟とともに下田港に入港した」との説がある。このとき海舟は、下田市の宝福寺で前土佐藩主の山内容堂と会い、龍馬の脱藩の許しを得たとされる。この脱藩の許しにより彼は自由に動き回れることになった。そう、ここ下田に龍馬飛翔の原点がある。これをもとに「下田龍馬伝」と称する一大誘客キャンペーンを興そうと言うのだ。

幟旗を立てること、龍馬小判を出すこと、ガイドすること、そのぐらいが大まかであった。その大まかさをより具体的にするための会議を進める役として下田に出向いた。利害関係がない、土地にしがらみもない第三者が会議を仕切ることが意外とうまくことが決まっていくことを何度か経験している。会議の仕方はNPO推進室に勤務している際に手がけた協働推進人づくり塾の研修でたっぷり学んだことが活かしている。

まずは、幟旗のデザインを決めた。黒の幟旗に白字で下田龍馬伝と宝福寺住職が書かれた字を使うことは決定事項、その上のマークをどうするか？龍馬のイラストキャ



クター数種類の内どれがいいのか、はたまた坂本家の家紋、さらには伊豆龍馬会のロゴマーク(坂本家の家紋に、山内容堂が龍馬の脱藩を許すに当たり下戸の海舟に波々と注がれた大杯の酒を干すように求め、それに応じた3つの杯を重ねたデザイン)と、なかなか決まらない。

同時に、地域通貨である龍馬小判(2,700円売りで3,000円の買い物可)、龍馬硬貨(900円売りで1,000円の買い物可)のデザイン案も示された。

行きつ戻りつ、何とかデザインは決まった。幟旗には龍馬と下田の関係を意味する伊豆龍馬会のロゴにした。市民が意外と知らない龍馬飛翔の原点である下田を知り、お客に説明して欲しいという願いからだ。

この幟は龍馬小判が使える店の印になる。であるならば、食事処どころなら龍馬井でも、旅館なら龍馬コーナーを設け関係図書の一つでも、何でもできることをしよう。名付けて「一店一龍馬運動」である。

さて、その龍馬の地域通貨。伊豆龍馬会のシンボルキャラクター「龍馬くん」を硬貨の表に、裏は龍馬会のロゴマークにすることになった。1,000円のコインは5万枚、小判は2千枚作り、4月から9月末にかけて、協賛する旅館や商店などで使えることになった。

ボランティアガイドの方々も会議に参加されていた。「下田のガイドを毎週末やっているが、夏の暑い時期は休みたい。ご覧のとおりの高齢でしんどいから」との発言があった。うーん、夏休みシーズンをはずすことはできない。無理にお願いするには限度を感じる。ここは若者に登場してもらわないと、幸い「下田龍馬伝志援隊」が結成されるとのことだから、何とかガイドの人材は確保できそうだ。せっかくだからガイド衣装も揃えて龍馬ゆかりの場所を案内しよう。龍馬上陸の地から宝福寺までの通りには龍馬地蔵を置いて、その名も「龍馬通り」としよう。話がどんどんふくらみ、皆が乗ってくる。

では、この「下田龍馬伝」キャンペーンをいかに知らしめるか？当初、旅館組合では旅行会社がつくる旅行商品パンフに高知、長崎について下田を出していく程度しか考えられていなかった。

全国放映されるぐらいの面白いオープニングイベントはできないか？

下田での吉田松陰の密航の場面が大河ドラマで放映される予定の2月7日その日に当てたい。今つくっている高さ約3メートルの「龍馬の木像」を上陸の地に立て、宝福寺まで引っ張って来られないか、その周りには幟旗を持った龍馬に扮した志援隊が取り囲む形で行列に加わる。終点の宝福寺で龍馬像を立て、皆で氣勢を上げ、幟旗を市内に立てるために向うという筋書きでどうだろうか？

ここまでで、二時間の会議時間が経とうとしていた。その後、本キャンペーンの役割分担を決め、小生の会議進行の役割はほぼ終えた。

あとは、さらに「志援隊」のみならずみんなで検討を進め、晴れて2月7日無事に「下田龍馬伝志援会」が出陣して欲しいものである。

どうか、高知、長崎ばかりでなく下田の龍馬に是非会いにお越しください。「下田龍馬伝志援隊」はじめ下田の龍馬が皆様のお越しをお待ちしております。

